

The Futaka Spirit

(現教だより第10号)

3年 体育科
活動名「3緑 ダンスパーティー」

指導者 大西 美輪 先生

温かい学級風土の中、臆せず生き生きと表現する子ども達の姿が印象的でした。ペア→全体→ペア→全体という思考を繰り返したことにより、子どもが意味付けを繰り返し、学びの有用感を感じることができていました。

【子どもの活動】

1 学習課題を確認する。

2 ペアの動きを考える。

3 全体交流を行い、友達のよい動きを見付ける。

4 ペアの動きを修正する。

5 全体で交流し、動きのよさを実感する。

6 本時の活動を振り返る。



これまでの見方をもとに課題解決の見通しをもつ



ペアでジャズに合う動きを考える



友達の姿からリズムに合う動きを探る



他のペアから取り入れた動きを試す



臆せず生き生きと表現する子どもたち



活動の振り返り (文責 橘 慎二郎)

【大西先生コメント】

今回の授業では、初めてのダンス授業という子どもたちの実態を踏まえて、ダンスを楽しめることを大事に授業を行いました。自分にとって意味のある知を想定しながら、授業の単元構成や本時の流れなどを今までと大きく変え、子どもたちの見方・考え方が育まれるように授業づくりをしました。この授業を受ける前と受けた後の子どもたちの生活場面や体育授業での変容をこれからも追いながら成果と課題を受け止め、今後の実践に生かしていきたいです。

大西実践【第3学年 体育科】

～ 3緑 ダンスパーティー ～



本実践の主張点

- I 見方・考え方を育むために系統性を重視して単元構成を行う。
- II 自分にとって意味のある知を創造するために、単元レベル・本時レベルで繰り返し学びを使えるものにする場を設定する。

教材の価値と、系統性を重視した単元構成について

大西提案では、現行の学習指導要領においては高学年で選択内容として扱うリズムダンスを、低・中・高学年それぞれで必修化し、系統性を重視しながら連続的な学びとして扱うことが提案された。その理由としては、大きく以下の2点が示された。

①中学校や高校のカリキュラムとのスムーズな接続を図り、生涯にわたって運動に親しもうとする態度を育むため。

②本領域の学びを通して、他の領域への汎用的な見方・考え方が育まれることを期待するため。

大西先生は②について、昨年度水泳の平泳ぎを学んだ子どもが「いち・に・さ～ん」という体の動かし方に気付き、リズムが大切だと語ったことや、ハードルを学んだ子どもが同様の感想を述べたことを挙げ、ダンスという領域の奥深さについて触れている。いろいろな運動の特性を、内容ではなく見方・考え方を通して捉え直すことで、子どもは新たに出合う運動であっても、それまでの学びと意識をつなげながら関わっていくことができるという主張である。

心身共に大きく発達する高学年時においても、子どもが心と体を解放するリズムダンスの取り組みを肯定的に捉えられるようにするためには、中学年期に学びの有用感をしっかりともたせておくことが大切である。大西学級ではほとんどの子どもたちが踊りを心から楽しみ、思いのままに表現することができていた。これは、苦手な子どもに視点を向けることによって個に寄り添う文化が生じ、支持的風土が形成されてきたのだと考える。言うまでもないことではあるが、教科学習でも創造活動でも、学びを支える土台をおろそかにせず、子どもに寄り添った学びを展開していくことが重要である。

体育科における自分にとって意味のある知の捉えについて

これまでの教科学習の提案において、「自分にとって意味のある知」は4つの観点から豊かに育まれることで見えてくるものであり、他の観点とは質的に異なっているということが共通理解されてきた。大西提案では、体育科における「自分にとって意味のある知」を、

① 普段の生活の中での場面で今まで育んだ視点で物事を見たとき、考え方をを使って物事を捉えること。

② 今まで経験したことを、育んだ視点で捉えて自分の学びとつなぎ、自分なりに解釈して使えること。

③ 本時学んだ知識・理解を自分なりに解釈して使えること。

という3点を整理して示している。討議においては、①～③の是非や解釈についていろいろな意見が出されたが、最終的に現時点での共通理解として、創造された知はある程度教師が想定しておくべきもの、という点に落ち着いていた。創造された知は子ども一人一人に対して個別に創造されるものではあるが、指導と評価の具体を見通しながら授業改善につなげていくためには、その方向性を教師は具体例を挙げながら、ある程度想定しておくことが重要である。これについては今後、また新たな教科学習の実践事例を通すことで、少しずつ具体が明らかになっていくことと思われる。

成果と課題

○ 支持的風土の醸成により、子どもは臆することなく自分を表現し、感受、想像しながら学びを意味付けていこうとする意識が高くなる。本実践ではそういった子どもの姿をあちこちで見ることができた。

○ 見方・考え方を軸に単元ごとの系統性を意識しながら学びを展開していくことで、子どもは初めて出合う対象についても、自然と自分なりの視点に着目しながら問題解決を進めていくことができたことが明らかになった。

△ 豊かな発想をもっている子どもも、全体交流で言葉にならない子どもの姿が見られた。身体で思いを表現する領域において、子どもの見方・考え方をどのような方法で見取るか、今後考えていく必要がある。

△ ペアでは豊かな関わりを見せていた子どもたちも、周囲の友達に対して、自然発生的に集まり、アドバイスを交換し合うという姿は見られにくかった。交流に必要な感をもたせる工夫が必要である。

△ 提案I、IIには階層差があり、同じ視点では解釈しにくい。提案者は項立てを工夫し、XのためにAをBする。そのために…というふうに、階層性をもたせながら提案を整理していくようにしたい。